

センス・オブ・ワンダーを育む道德教育に向けて

—モラリティ道德性の生物学的基礎づけから—

菱刈 晃夫

はじめに

「生きる力」再生のためには、「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに見る感性」が不可欠であることは、すでに指摘した¹⁾。これは、海洋生物学者レイチェル・カーソンの言葉であった。再確認しておこう。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます²⁾。

こうした感性を大人になっても持ち続けられなら、わたしたちはどれほど幸せであろう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです³⁾。

先の拙稿では、特別活動のなかで、このセンスをいかに育むのかについて簡単な考察を試みた。小論では、派生して道德教育がもつ課題について触れてみたい。

さて、このセンスは、カーソンのように、自然という力の源泉に位置している。つまり、人間も他の動物や植物などと変わらない生物の一種として、本来この自然のなかに深く根づいている。わたしたちは、人間独自の「人間圏」⁴⁾を、近年あまりにも急速に発展させ過ぎてしまったため、往々にしてこのことを忘れがちである。そして、「人工的なもの」に夢中になってしまいがちである。その最たるものは、経済的

効率や儲けなど⁵⁾。

だが、翻って見れば、わたしたち人間も、長い進化の過程を経て、チンパンジーからあるとき袂を分かち、現在に至る、いわば「一匹の人間」⁶⁾である。わたしたち一人ひとり（あるいは一匹）のなかには、今に至るまでの生物進化のプロセスが確実に刻印されている。進化論を全否定する立場でない限り、もはやこのことはある程度、受け容れられた事実であろう。

すると、センス・オブ・ワンダーもまた、本来この生物という自然のなかに根ざしているとはいえないであろうか。

確かに、自己意識と言語を持つ人間だけが、これをこう表現しえるのみである。人間はイマジネーションを駆使して、古今東西、鳥であれ虫であれ、森であれ花であれ、すべての存在が、この世界の美しさ感激し、これを賛美している、と芸術や文学や宗教、そして哲学を通じて（彼らになりかわって）表現してきた⁷⁾。豊かな想像力を働かせて世界を眺めれば、いかにも生き物はすべて、生きて在ることへの喜びの賛歌を歌っているように思えないこともない。カーソンは海洋生物学者として、海辺に生きる生き物から、こうしたささやきや歌を聞きとったに違いない。

わたしたち皆が詩人になる必要がある、といたいわけではない。センス・オブ・ワンダーが、生き物としての人間のなかに生来的に具わる可能性について考えてみたいのである。しかも、このセンス・オブ・ワンダーは、人間にとってのみ問題となる道徳性の根幹に位置するのではなからうか。つまり、モラル・センス（道徳感覚）とも通底しているのでは。

もちろん学習指導要領にも、このことは、「道徳の内容」の視点3「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」として明示されている。いくつか取り上げてみよう⁸⁾。

- ・身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。
- ・美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。
- ・自然のすばらしさや不思議さを知り、自然や動植物を大切にする。
- ・美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
- ・生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

・美しいものに感動する心や人間の力を越えたものに対する畏敬の念をもつ。

すべては今わたしたち一人ひとりが、ここにこうして生きて在ることの不思議さと有り難さへの感動から始まる。そこに自他の生命の尊重が育つ。センス・オブ・ワンダーには、他者を含めたわたしたち自身の存在への気づき（あるいは自覚や自覚め）も含まれている。それは人間が他の生物と同様に、この地球上で共存していくことを可能にする感性でもある。地球温暖化を想起するまでもなく、この気づきを忘れた人間圏の肥大は、反転して、現代わたしたち人間自身の生存の危機へとつながっている。今一度、できるだけ多くの人々が、センス・オブ・ワンダーを再生させねばならない。そして、教育においては、これを育む努力をしなければならない。

本稿では、こうした「一匹」の生き物としての人間の人間性を証するモラルティの生物学的基礎をめぐって、とくに社会生物学の知見を、まず簡単に整理してみたい。が、こうした道徳のいわゆる自然主義的基礎づけという試みは、すでに宗教や哲学の方面からも、表現を変えて古来なされてきている。よって、まずはこの点について簡単に押さえておこう。

1 節 センス・オブ・ワンダーの所在としてのからだ、あるいは心 — 受動意識について

「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する」というのは、まさに人間ならではの道徳の基本であろう。人間だけがこうした気づきを自覚でき、また逆に、これとは正反対の行動をとることもできる。生命のかけがえのなさに対するワンダーのセンスから、他者に対する愛の働きも生まれてくる。しかし、なかなかこうした気づきには至らない。

ともかく、神秘さや不思議さの気づきは、わたしたちのからだ、そして心によって感じられるクオリアである。ちなみに、クオリアとは、「私たちが針に刺されたときに痛いと感じたり、うれしいときに幸せだと感じたりする、心の質感のことである。意識の現象的な側面のこと、と言い換えてもいい」⁹⁾。わたしたちは生きていく限り、こうしたクオリアの連鎖に浸り続けることになる。

もちろん、今わたしは「こう感じている」と意識した途端、それは「……というクオリア」だと言葉で表現することも可能であるが、しかし、たいていは意識することなく、わたしたちはある種の気分や情動や感情の状態に、すでに無意識的にとらえられてしまっている¹⁰⁾。いわば心や意識には、からだや無意識が先立ち、わたしたちは、近代的な人間観が主張するほど、自律的に生きているわけではない。「我思う、ゆえに我在り」ではなく、「我在り、ゆえに我思う」のほうが、むしろ現実に即しているといえよう。厳密な自律は、フィクションである。

仏教には、こういう言葉がある。ブツダは、こう教えたという。

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される¹¹⁾。

わたしたちは日常生活で、確かにあとから振り返ってみれば、わたしは「こう思う」から「こうした」のだ、と理由づけすることが多い。そう思う心が原因となって、ある行為が生じた、というふうに。

しかし、これはすべてには当てはまらない。むしろ実際は、その逆。なぜかしらそう行為してしまったあとで、そう思ったからだ、そう心が命じたからだ、と理由づけをしたがるのである。3節で取り上げるが、わたしたちの日常は、それほど自律的かつ意識的に営まれているわけではない。

よって、ここでの心とは、きわめて心もどない心でしかない。ブツダは、この点について、こうも述べている。

心は、動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直くする。一弓師が矢の弦を直くするように¹²⁾。

心は、捉え難く、軽々とざわめき、欲するがままにおもむく。その心をおさめることは善いことである。心をおさめたならば、安楽をもたらす¹³⁾。

からだのなかにある心。否、むしろからだと一体の心は、いわくいいがたくすでにからだによって規定されてしまっている。その結果、心は知らぬ間に動揺し、ざわめく。

とらえ難く、いつしか欲のままに動かされている。心は、わたしの主人でも、中央でも、司令官でもない。だからこそ、その心をおさめられる人がいれば、その人は英知ある人と呼ばれるというのである。その努力と克己をブツダは教えているといえるが、出発点は、心の心もとなさであることに注意したい。だからこそ、の勧めといえよう。

前野隆司によれば、これは「受動意識仮説」といわれている。次の4点に集約されるというので、引用しておこう¹⁴⁾。

- (1) 「無意識」というシステムは、「意識」によるトップダウン的な決定に従って仕事をする追従的なシステムではない。むしろ、部分部分のモジュールが独立してそれぞれの得意な情報処理を同時におこなう超並列計算機である。四方八方のモジュールから湧き上がってきたさまざまな自律分散の情報処理結果のうち、特に目立つもの（たとえば発火頻度が高い神経集団が生成した情報）が民主的に選び出されて「意識」に転送される。
- (2) 一方、「意識」という機能は、脳の重要事項の決定を一手に担うリーダーではない。むしろ、無意識の情報処理の結果を受け取って、あたかも自分が注意を向けて自分の自由意志でおこなったことであるかのように幻想体験し、その体験結果をエピソード記憶に転送するだけの、受動的・追従的な機能を担うシステムである。また、意識体験は、小びとたちの並列的な体験よりも単純で直列的である。
- (3) つまり、心は民主主義社会のようなボトムアップなシステムである。
- (4) そして、意識の現象的な側面は、幻想のようなものである。

要するに、わたしたちの心とか意識とか自我とかいわれる中心は、からだ全体からのボトムアップによる結果なのであって、決してその逆ではないということである。つまり、心や意識や自我がボトムダウンにからだを支配したり制御したりは、実はできないことを示している¹⁵⁾。もちろん、たとえば今このページをめくろうとしてページをめくる、といった自由意志を否定するわけではない。ふだん何気なく生きている

日常現実を振り返ろうとしているだけである。

が、これはいわれてみればごく当たり前のことである。何事も、心がいちいち指令を出して、この心から実行許可の捺印をえなければ行動できないといったことになれば、わたしたちは身動きできなくなってしまうに違いない。わたしたちが歩くという動作をいちいち意識したら、いかに滑稽なものとなるか。また3節で取り上げるとしよう。

前野は、こうした受動意識の宗教的、哲学的伝統を手短に紹介している¹⁶⁾。たとえば、ヒュームのいう「知覚の束」という考えも、興味深い。詳しくは稿を改めて取り上げることにするが、簡単に触れておこう。

私たち人間はいかなる時も知覚なしには自分自身を決してとらえることができない。心とは、いわば、たくさんの「知覚」がめまぐるしく登場し続ける劇場のようなものである。つまり、人間の心とは、思いもよらない速さで繰り返される「知覚の束」にすぎない¹⁷⁾。

わたしたちのクオリアは、そしてそう反省しているわたしという自我は、決して実体としてあるわけではない。あるのは、心の臓器を含むただこのからだだけ。そしてこのからだのなかの自動的な物理的現象として、「快樂や苦痛や感動や感情や情念といった一連の印象全体」¹⁸⁾があるだけである。あとから反省して言葉で表現してみれば、これらを指して心理的諸情態だとか、クオリアだとかいっているだけである。そして時がくれば、このからだも消える。まさに「色即是空、空即是色」ではないか¹⁹⁾。

このように見てくると、センス・オブ・ワンダーにおける感性は、こうしたからだに根づく受動的な作用であることが明らかとなる。物理的な、まるで自動機械のような生物に、進化の過程において、やはり必要かつ有益であったからこそ身につけられた感覚なのかもしれない。社会生物学の観点から、次に探ってみよう。

2節 社会生物学から見た道徳性

いうまでもなく E.O. ウィルソンは、『社会生物学』の大著により、その名を知られる 20 世紀を代表する昆虫学者、生態学者、進化学者である²⁰⁾。『人間の本性につい

て』も大いに話題となり、いわゆる「社会生物学論争」を引き起こした²¹⁾。しかし、「効果的な教育を望み、調和と創造性のある社会を実現しようというなら、人間という種の生物学的な起源を理解しないわけにはゆきません」²²⁾という言葉には、たいへん惹きつけられる。「人文・社会諸科学は、物理学抜き、天文学、化学抜き、生物学、そして代数抜きの数学のようなもので、表面的な現象の単なる部分的な記載の域にとどまってしまう」²³⁾というのは、的を射ているといえよう。『知の挑戦』²⁴⁾では、科学的知性と文化的知性の統合を企てているが、とりわけ教育学においては、こうした知の統合は推進させられていかねばならないであろう。小論も、その微々たる端緒である。

ともかく、ウィルソンによれば「ヒトという種は、神の被造物ではなく、遺伝的偶然と環境のもたらす必然の産物」²⁵⁾であり、「種の起源の問題に神を介入させるのは、もはや無理なこと」²⁶⁾である。こうした立場や見方に対しては、先のさまざまな論争があるが、それはさておき、ウィルソンらによる社会生物学から見た道徳性について一瞥しておきたい。

まずは、生物という存在をどうとらえるか。

どんな生物も、その遺伝的歴史によって形成された諸規範を超越する目的などというものを持ってはおらず、人間もその例外ではないということである。もちろん、生物が、物質的・知能的進歩の大きな可能性を持つことはありうるだろう。しかし、内在的な目的を所持したり、あるいは当面の環境を超越した何らかの要因によって進路の誘導を受けるなどということが生物に起こるはずはなく、さらに、分子的な構造の故に生物が自動的に何らかの進化上の目標に向かって前進するなどということもありえないのである²⁷⁾。

ウィルソンは徹底した経験主義に立つため、「道徳の指針を人間精神の外に存在する」²⁸⁾とはとらえない。道徳はあくまでも人間精神の考案物である。つまり、「神」といった超越者を立てることは一切しない。人間の精神といっても、それはこの物理的からだのなかに、とりわけ脳という心を生み出す臓器を道具として機能しているのであって、これが物理的なプロセスから逃れることなど不可能である。そして、あり

とあらゆる物質や生命の進化には、とくに定められた目標や目的といったものではなく、それはむしろただ変化と呼ばれるほうがふさわしい²⁹⁾。たとえばキリスト教のような見方をここに少しでも持ち込めば、すべてはある目的に向かって進歩するなどといったくなるわけであるが、ウィルソンはそうした立場にはいない³⁰⁾。これは、ポスト・モダンの哲学者リオタールにも共通する見方である。歴史に明確な目的や到達点など存在しない。

人間は歴史の中でただ意味もなく増殖してきただけであり、人々の歴史や、個人の一生に、あらかじめ定められた目的はない。したがって、存在するのは、小さな個人個人の一生という物語だけである³¹⁾。

先に見た「受動意識仮説」によれば、わたしというクオリア＝意識の現象的側面は、幻想のようなものである。ただ人間だけが、ありがたいことに、この存在をモニターできる心を獲得することができた。本来は「空」であるのに、これを「色」つまり存在として認識させてもらえたという、何という有り難さ（だが、ここに幻想にしがみつくと執着と死への恐怖も生じることになる）³²⁾。なのに、「人間はなんて愚かなのであろう。本質的な目的のない人生を、他者との競争のために消費した後に死んでいく」³³⁾。「意味もない増殖」が今にも拍車がかかり、やがては増殖しえない状態が近づきつつある、といったところが現在であろうか。

さて、ともかく人間を超越した「神」といった存在を一切前提しないところから、心や道徳性の問題に取り組んでみよう、というのが社会生物学からのアプローチである。ちなみに、宗教を信じるかどうかは、「分かる」次元の話ではない。宗教はあくまでも「納得する」次元の話である³⁴⁾。個人が自分の一生という物語を納得する上で活用すべきものであり、やたら他人に押し付けるべき時代では、もはやあるまい。

では、このようなクオリアを生み出す脳は、なぜ存在するのだろうか。そして、心は。さらに、道徳性は。ウィルソンは、こう述べる。

脳というものが存在するのは、それを構築せしめる遺伝子群の生存と増殖にとって、脳自体が促進的効果を示すからなのだけということである。人間の心というものも、

生存と繁殖のための一つの装置なのであり、理性とは、そのような装置が行使する各種の技術のうちの一つにすぎないのである³⁵⁾。

かつて、ショーペンハウアーは人間存在の根源に「生への盲目的な意志」を見たが、わたしたちは生き物として、確かに「生き続けたい」という本性だけを有しているのかもしれない。ただ、人間だけがそれに止まらず、つまりパンのみ生きるにあらず、ロゴス言葉（知性）による意味を見出そうとする。が、ウィルソンはいう。

知性というものは、原子の理解を目的として作り上げられたものでもなければ、ましてや知性自体を理解するために作り出されたものでもない。それは、人間の遺伝子の生存を促進させるためにこそ作り上げられたものだといえるのである³⁶⁾。

今ここでこのようなことを書いたり読んだりして考えていることそのものが、実は知性本来の目的ではないということ。すなわち、まさにこうした知性の使用はスコレー（暇）においてなされるものであり、これが哲学であり、学問だということかもしれない。

ただし、脳や心や知性や理性とは、第一に生存のための装置であることを確認しておこう。すると、生存したいと欲する生物としての人間は、当然のことながら養育に向かおうとする³⁷⁾。

人間というものは、ヒトという種を特徴づけているあらゆる衝動、機知、愛情、自尊心、怒り、希望、そして気づかいのすべてを傾けて、結局のところは、同じ人生のサイクルを子孫たちが繰り返してゆくのを確実に手助けしようとするものなのである。自省的な人々はそれに気づいているのである³⁸⁾。

この「手助け」が養育であり、教育である。ただ、この手助けはただ生存そのものが第一目的であり、これを超えた目的を有しているわけではない。宗教や哲学、さらに教育思想と呼ばれてきたものなら、これに加えてさまざまな（立派な）意味づけや（壮大な）方向づけを行おうと試みるであろうが、ウィルソンは次のように断言する。

我々には特別な目的地など無いということなのだ。ヒトという種には、それ自体の生物学的本性から独立した目的など備わってはいないのである³⁹⁾。

ゆえに、信仰（神やアイデアなど）もまた「生存を促進するための機構」⁴⁰⁾である。逆に、生存をおびやかす機構ともなりうる信仰でもあるが、わたしたちはひたすら「生きよう」としているだけの「一匹」のただの生き物である。

この上なく高貴な諸々の衝動も、詳しく調べてゆくと、実は生物学的行為に姿を変えてしまうものようである⁴¹⁾。

納得するかどうかは別として、社会生物学から見た^{ヒューマン・ライフ}人 生 とも、わたしたちは正面から向き合う必要があるろう。

すると、次に道德性は、こうした生物としての人間のどこに位置づくのであろうか。ウィルソンは、こう述べる。

人間というものに一段と真実に近い定義を与えた上で、新しい道德を探究するためには、人間の内面に目を向けて心という機構を解剖し、その進化史を改めて辿ってみる必要があるのである⁴²⁾。

これは次節で取り上げることとするが、重要なのは、この認識である。

我々の脳の中には、複数の生得的な検閲装置および動機付け装置があつて、これらが、我々の倫理的諸前提に無意識のうちに大きな影響を加えているということ。そして、道德性は、それら諸装置を足がかりとして、本能として進化したのだということである。もしもこの推察が当たっていれば、あらゆる倫理的主張や多くの政治的行為の源泉となっている人間的な諸価値の起源や意味自体が、遠からず科学的研究の対象となるだろう⁴³⁾。

わたしたちのからだに、とりわけ心を生み出す臓器としての脳において「無意識」のうちに自動的に大きな影響を及ぼしているさまざまな機能。これらの上に、道徳性は本能として進化してきたということ。ここから始めよう。

生物学では道徳性を、(簡単にいえば)「自分の欲することをめざす行為が、他者の欲求や利益を妨げるとき、どのようにして自己抑制するかということ」⁴⁴⁾ととらえる。つまり、利己主義的行動ではなく、利他主義的行動である。ひたすら「生きたい」とする生物にとって、そのための欲求を一時的にせよ抑制することは、自己以外の生き物の利益を優先することになる。本来、自己の生存のことしかしない生物において、こうした利他行為は、なぜ進化してきたのか。ウィルソンが示唆したその後の研究は、今日ますます進んでいる⁴⁵⁾。いましばらくウィルソンの見方について確認しておこう。

彼は、人間の道徳や倫理が、からだや脳や心のなかに、無意識的なメカニズムとして進化の過程において埋め込まれているととらえる。よって、こうした問題に古来言葉を費やしてきた哲学者にしても、結局のところは「彼ら自身の個人的な感情的反応を頼りに判断を下しているのであり、その作業はあたかも姿を見せない祭司のお告げを頼りにしているようなもの」⁴⁶⁾であり、一般人と何ら変わるところがないという。では、この祭司はどこにいるのだろうか。

この祭司は、脳の感情中枢の奥深い場所、おそらくは大脳辺縁系の一部に住みついている。(中略)人間の情緒的反応や、これらを基礎とするより一般的な倫理的行為は、数千世代にわたって働いてきた自然選択によって、かなりの程度までプログラムされているのである。科学が取り組むべき課題は、このプログラムが人間にどのくらいの強さの制約を加えているかを測定し、脳内にあってその制約を生ぜしめている原因を究明し、さらに心というものの進化史を再構成することによって、そういう制約の意義を解説することである⁴⁷⁾。

しかし、これは「自らに備わった生物学的特性を頼りとした自動操縦をやめて、生物学的知識にもとづいた手動操縦に切り換えねばならないということ」⁴⁸⁾を、ある程度意味することになろう。実際、現代において、これほど道徳や倫理、さらに教育の在り方や方法が問題化しているのは、自然に根ざすプログラムが自明ではなくな

りつつあり、この機能を十分に発達させる余裕もないまま、社会や文明が急速に変化していることによろう。もはや自動操縦では危険な、いわば人類の手動離着陸領域に入ってしまった。このような不自然な時代だからこそ、とくに道德教育に携わる者にとっては、「脳内の検閲装置および動機付け装置のうち、我々はいったいどれに従い、またどれを抑制あるいは昇華すべきなのか」⁴⁹⁾ について、できるだけ最新の見識をえておくことは必要だと思われる。しかも、「そういった諸装置は、人間性のまさに核心に位置する情緒的指針である」⁵⁰⁾。センス・オブ・ワンダーにせよ、モラル・センスにせよ、先の拙稿や本稿でもいちばんの問題にしているのは、こうしたセンス、感性や感覚、つまり「情緒的指針」の重要性の再認識と、正しい位置づけ、そして教育である。混迷する人間社会や教育界において、この作業は不可欠であろう。

が、これはかなり困難なことでもある。

この研究を推し進めるためには、自然科学を社会・人文科学に統合することを目指しながら、人間の本性を自然科学の対象として研究する以外に手はない⁵¹⁾。

人間の本性の分析に関する重要な発展の第一歩は、心理学や人類学、社会学、経済学など各種の人文・社会科学と、生物学の結合という形をとるだろう。二つの文化が互いに相手側の領域に十分目を向けるようになったのはごく最近のことである⁵²⁾。

とりわけ教育学は、今後こうした知の統合のさなかで研究を発展させていく必要があるろう。

さて、できるだけまちがいを避けながら、道德や倫理の手動操縦にチェンジするためには、生物学的特性を頼りとする自動操縦の仕組みを解明しておかなければならない。もちろん、その試みはまだ始まったばかりである。しかも、ふだんの自動操縦をすべてやめる必要もない。むしろ、わたしたちの生物としての自動操縦がうまく機能することを期待し、これを育みながら、破綻が見られる箇所を手動操縦できるよう、うまい手だてを考えていかなければならない。これが、なかでも道德教育に与えられた最大の課題である。道德や倫理の自動操縦法的一端を明らかにするため、最新の脳

科学からの見解を、次に確認してみよう。

3節 脳のなかの道徳

脳神経科学者のガザニガは、『脳のなかの倫理—脳倫理学序説』で、こう述べている。

つまり、重要なポイントは、人間という生物に生得の道徳感が備わっているのか、もし備わっているなら、私たちはその存在を認めてなおかつそれに従うことができるのか、である。人を殺してはいけないのは、人を殺してはいけないからであって、神やアッラーやブッダがそう言ったからではないのだ⁵³⁾。

倫理や道徳を、神といった超自然的な存在に基礎づけるのではなく、あくまでもこのわたしのからだという自然に基礎づけること。それは、からだの一部であり、倫理や道徳の大部分にかかわる脳という自然に、これらを位置づけることを意味する。こうした試みは、決して現代に始まるのではない⁵⁴⁾。が、今日では、人間のからだを含み込んだ自然科学の目ざましい発達により、日々新しい見解が明らかにされてきている。その一端を確認しておきたい。

人間には生れながらに道徳感が備わっていて、基本的な能力のひとつとして善悪の判断ができるという見解は、最近までは根拠もないまま主張されるか、人間行動の分析に基づいて論じられることが多く、生物学的な実証に基づく議論は少なかった⁵⁵⁾。

先に触れたように、道徳哲学の歴史を振り返れば、その当時のあらゆる知を駆使して、道徳の基礎づけを試みた例はいくつもある。現代では、それがより自然科学的に実証的に証明されつつあるといったところか⁵⁶⁾。

善悪にかかわる判断が脳活動で説明できると思わせる研究が、このところ次々と発表されている。通常は感情の情報を処理する脳領域が、ある特定の道徳的判断を下

すときにだけ活動するのもわかった。善悪の判断とはどういう性質のものか、またその判断が一致したり違ったりするのはなぜかについて、数世紀にわたり激しい議論が続けられてきたが、その問題が今、現代の脳画像技術で速やかに疑いようもなく解決されようとしている⁵⁷⁾。

実に恐ろしい時代が近づきつつあるのも事実であるが⁵⁸⁾、それはさておき、感情と道德がきわめて密接な関係にあることに注目しておきたい。まさにモラル・センスは感情や直感に根ざすとの見方である。こうした見方は、道德哲学史でも古来見受けられてきた⁵⁹⁾。最新の脳科学は、これを支持しようとしているかのようだ。

最新の研究からすると、人が道德的信念に従って行動しようとするのは、善悪の判断が求められる問題を検討しているときにその人の感情にかかわる脳領域が活性化したからと見られる。一方、同等の判断が求められる問題に直面しても行動しないと判断するのは、感情の領域が活性化しないからだ。これは、人間の知識の驚くべき進歩である。脳の自動的な反応を見れば、どのような道德的判断が下されるかを予測できる可能性が開けたのだ⁶⁰⁾。

感情と道德をめぐる問題についてはすでに論じたので⁶¹⁾、ここでは補足を試みたい。ガザニガは、道德哲学の三つのサンプルを取り上げている。

その三つとは、功利主義、義務論、徳倫理であり、それぞれジョン・ステュアート・ミル、イマヌエル・カント、アリストテレスが唱えた⁶²⁾。

これらに、おのおの三つの脳領域が対応するという。整理してみよう。

- ①功利主義……J.S. ミル……最大多数の最大幸福を生み出す行為が正しい。最終的な結果に注目……前頭前野、大脳辺縁系、感覚野。
- ②義務論……I. カント……行為の結果で善悪を判断するのではなく、動機の善し悪しを重視。理想的な結果を得るよりも、他人の権利を侵害しないことのほう

が重要……前頭葉。

- ③徳倫理……アリストテレス……徳を修めて悪を避けることを求める……すべての脳領域を適切に連携させながら働かせる。

もちろん単純化されすぎではいるが、明快に考えようとする上では、よい示唆を与えてくれよう。

さらに、善悪の認知に関する研究の三つのテーマがあるという⁶³⁾。これも整理しておこう。

- ①道徳的感情……行為の動機となるもの。主に脳幹と大脳辺縁系によって生み出される。性欲や食欲などの基本的欲求をつかさどる場所。
- ②心の理論……他者に対して適切な反応をするために、相手が何を考えているかを推測する能力。社会規範になかった行動をとるうえでの指針であり、善悪の判断に欠かせない能力。ミラーニューロン、眼窩前頭皮質、扁桃体の内側部、上側頭溝。
- ③抽象的な道徳思考……さまざまな脳内システムの関与。

いずれも大切であるが、とりわけ道徳教育においては、まず道徳的感情が出発点になるのではなかろうか。しかも、これは性欲や食欲など、生物としての基本的欲求と同根である。つまり、道徳的感情は、生き物としての「一匹」の人間が、生存に役立つものとして進化の過程で身につけた本能に近いものなのかもしれない。こう見ると、やはりモラル・センスは、生物学的な自然のなかに基礎をもつといえそうである。道徳教育は、これをどう活性化するのであろうか。次に、心の理論に基づく共感や想像力を、道徳教育はどう育もうとするのであろうか。最終的に、こうして道徳をめぐって考えることを含め、抽象的な道徳思考に向けて、道徳教育に何ができるのであろうか。

道徳教育には以上のような課題が見出されるわけであるが、とりわけ①のテーマをここでは強調しておきたい。それは、ガザニガの次の見解にもよる。

これがいちばん重要なのだが、〔善悪の判断について〕自分の選択の理由を明確に

説明できた者はひとりもいなかった。つまり、道徳上の難問に答えるときには、全人類に共通する無意識のメカニズムが働いているように思える⁶⁴。

繰り返すように、道徳的判断は、そのほとんどが自動操縦によってなされている。
ロゴス
理屈はそのあとだ。

善悪の判断はほとんどが直感に基づいている。ひとつの状況や意見に接したとき、私たちはそれに対して何かを感じ、なぜそう感じたのかを説明する理屈を組み立てる。簡単に言えば、人間は状況に対して自動的に反応している。脳が反応を生み出しているのだ。その反応を感じたとき、私たちは自分が絶対の真実に従って反応していると信じるに至る⁶⁵。

しかも、「進化は個人ではなく集団を救う。集団を救えば個人も救われるかららしい。そのため、私たちは何らかの方法で無意識のうちに人の心を読むようになった」⁶⁶。前節で触れた利他行為も、ここに位置づけられるであろう。わたしたちの利己的遺伝子は、集団、あるいは人類の存続において自己を保存しようと試みるのである⁶⁷。

さて、さまざまな知見がぞくぞく明らかになりつつある現代。この分野においても、何が正しいのかは、まだ明らかにはなっていない。古今東西の道徳哲学の知恵を裏づける自然科学的知識が、日進月歩で増殖しているといった状況である。ただ、次のことだけは確かだ、とガザニガはいう。

人間が生きる指針にしているらしき善悪の真理は、私たちとは切り離された独立したルールとして存在していて、人はそれを学び、それに従っているのだろうか。それともそのルールは、脳が自らに組み込まれたシステムを使って他者に共感し、それによって相手の行動を予測して、しかるべく対応した結果として生まれたものなのか。どちらが正しいにせよ、ひとつ確かなことがある。ルールは間違いなく存在するということだ⁶⁸。

現代の脳神経倫理学は、「人類共通の倫理が存在するという立場に立って、その倫理

を理解し、定義する努力をしなければならない」⁶⁹。

人間は何かを、何らかの自然の秩序を信じたがる生き物だ。その秩序をどのように特徴づけるべきかを考える手助けをすることが、現代科学の務めである⁷⁰。

もちろん道德教育も、この成果を積極的に取り込んでいかなければならない。

以上、道德性を生物としての自然のなかに位置づけ、そして解明しようと試みるにつれ、この自動操縦の巧妙な装置に、わたしたちは目を見はらざるをえない。

まずは、わたしたち自身が、わたしという人間の自然に驚嘆すること。そこには、人間ならではの道德性に対する驚嘆も、必然的に惹起させられるであろう。

つまるところ、人間のモラリティ、およびその探求と教育は、人間による人間自然へのセンス・オブ・ワンダーによって、初めて覚醒させられる。しかも、この感性は、理屈よりさらに深く、生物としての感情に根ざしているのである。

おわりに

センス・オブ・ワンダーが、わたしたち自身の存在そのものに対する驚きから発すること。しかも、その生物としての存在にはモラリティが、あたかも自動装置のようにして組み込まれていること。道德教育は、まずはこのようなわたしたちの生に対するセンス・オブ・ワンダーを育むという課題をもつ。

ところで、事実命題「○○である」から規範命題「××すべし」は導けないとし、「べし」を「ある」に基礎づけようとするを自然主義的誤謬とする説もある⁷¹。ドーキンスの「利己的遺伝」によれば、「純粹で、私欲のない利他主義は、自然界に安住の地のない、そして世界の全史を通じてかつて存在したためしのないもの」⁷²である。生物としての「である」と「すべし」は、区別されなければならない。

が、これに関して、周知のようにドーキンスは、人間の遺伝子 (gene) に加えて、ミーム (meme) という新しい自己複製子を提唱する。

新登場のスープは、人間の文化というスープである。新登場の自己複製子にも名

前が必要だ。文化伝達の単位、あるいは模倣の単位という概念を伝える名詞である⁷³⁾。

ギリシア語のミメシス（模倣）からミーム。ジーンにちなんだネーミングである。わたしたちは死後に、遺伝子とミームしか残すことができない。

われわれは、遺伝子を伝えるためにつくられた遺伝子機械である。しかし、遺伝子機械としてのわれわれは三世代もたてば忘れ去られてしまうだろう⁷⁴⁾。

が、わたしたちには模倣能力をもつ脳がある。そこに、ミームは増殖し、進化し続けていく。すると、次のようになる。

少なくともわれわれには、単なる目先の利己的利益より、むしろ長期的な利己的利益のほうを促進させるくらいの知的能力はある。（中略）私たちには、私たちを生み出した利己的遺伝子に反抗し、さらにもし必要なら私たちを教化した利己的ミームにも反抗する力がある。（中略）われわれは遺伝子機械として組立てられ、ミーム機械として教化されてきた。しかしわれわれには、これらの創造者にはむかう力がある。この地上で、唯一われわれだけが、利己的な自己複製子たちの専制支配に反逆できるのである⁷⁵⁾。

ドーキンスは、「われわれの遺伝子は、われわれに利己的であるよう指示するが、われわれは必ずしも一生涯遺伝子に従うよう強制されているわけではない」⁷⁶⁾ という。ここに人間の自由が、そして教育の可能性が残されている。

倫理や道徳を徹底して自然化（あるいは生物学化）することをめぐる議論はさまざまである⁷⁷⁾。が、工学の基礎として物理学があるのと同様に、倫理学の基礎に生物学があるのはむしろ当然ではないか⁷⁸⁾。自然哲学と道徳哲学がまだ密接に関係していた時代には、道徳を自然のプロセスのなかに位置づけようとする試みがなされていた⁷⁹⁾。

わたしたち「一匹」の人間は、生物としてどこまでも利己的である。しかし、そこには単なる利己性を超える可能性も含まれている。「である」から「すべし」は導き

出せるかどうかは別として、わたしたちの意識そのものは、すでに何らかの価値を無意識的かつ自動的に選択してしまっている。そこには、自己保存のためのモラリティがすでに作動しているのかもしれない。結局のところ、倫理や道徳とは、わたしたち一匹一匹の人間が生き続ける上で発達させてきたファンクションであるから。この意識の問題に、最後にごく簡単に触れておきたい。

やはり、人間における意識とは何であろうか。意識の機能とは。

意識というものがなければ、自分がどのように感じているのかということ、あなたはいかにして知るといえるのでしょうか。それが意識の機能なのです。それは（中略）本来内観的なものであるばかりでなく、本来評価的なものでもあります。それは価値を知らせるのです。それは私たちに、あるものが「良い」か「悪い」か、ということを知らせるのですが、その知らせ方は、物事を良いと感じさせるか、悪いと感じさせるか（あるいはその間か）、ということによっています。そのようなことのために意識、感じはあるのです⁸⁰⁾。

意識は、わたしたち一人ひとりの生存にとって不可欠の機能であって、「古来一連の生物価(biological value)に深く根ざしています。このような価値が感じの本質であり、そして意識はすなわち感じなのです」⁸¹⁾。生きようと欲する一匹の人間が、その生存にとって心地よく有利な状態を保つために、自己の現在の内的状態と外部状況とのあいだにあって作動する意識。「意識は自己への気づき (self-awareness) という背景媒質を基盤とした、私たちのまわりで起こっていることへの気づきから成っている」⁸²⁾もので、しかもそれは無意識的に評価的であり、生存という価値（生物価）に否応なく深く根ざしている。ゆえに、こうした意識によって語られる倫理や道徳が、生物学的な自然を無視することはもはやできないのである。

畢竟するに、理屈よりもさらに深い感じ、あるいは感情に基礎づけられるモラリティ。それをどうさらによりよく育むのか。人間存在へのセンス・オブ・ワンダーを育むことから始め、この方策を模索していかなければならない。が、この具体的方法については、別稿に譲るとしよう⁸³⁾。

注

- 1) 拙稿「センス・オブ・ワンダーを育む特別活動―「生きる力」再生のために」(『人文学会紀要 39号』所収、2007年)を参照されたい。他にも、上岡克己他編著『レイチェル・カーソン』(ミネルヴァ書房、2007年)も参照されたい。
- 2) R.カーソン『センス・オブ・ワンダー』(上遠恵子訳、新潮社、1996年)、23頁。
- 3) 同上。
- 4) 松井孝典『宇宙人としての生き方―アストロバイオロジーへの招待』(岩波新書、2003年)などを参照されたい。
- 5) たとえば、辻信一『「ゆっくり」でいいんだよ』(ちくまプリマー新書、2006年)などを参照されたい。
- 6) 正高信男『ヒトはいかにヒトになったか―ことば・自我・知性の誕生』(岩波書店、2006年)、224頁を参照されたい。他にも、同著者による『ヒトはなぜヒトをいじめるのか―いじめの起源と芽生え』(講談社ブルーバックス、2007年)など、興味深いものが多いので併せて参照されたい。
- 7) ドイツロマン主義の文学や哲学や芸術など、その最たるものであろう。たとえば、中井章子『ノヴァーリスと自然神秘思想』(創文社、1998年)を参照されたい。
- 8) 「小学校学習指導要領 道徳編」(平成11年)の「道徳の内容」より。
- 9) 前野隆司『脳の中の「私」はなぜ見つからないのか?―ロボティクス研究者が見た脳と心の思想史』(技術評論社、2007年)、30頁。
- 10) たとえば、伊藤勝彦他編『情念の哲学』(東信堂、1992年)に含まれた、ハイデガーに関するものなど、興味深い諸論考を参照されたい。
- 11) 『ブッダの真理のことば 感興のことば』(中村元訳、岩波文庫、1978年)、10頁。
- 12) 同前書、15頁。
- 13) 同前。
- 14) 前野前掲書、68-69頁。
- 15) たとえば、山田慶児『朱子の自然学』(岩波書店、1978年)のなかの「ブラックボックスとしての心」も参照されたい。
- 16) 前野前掲書。
- 17) 前野前掲書、128頁。
- 18) 同前。
- 19) 「色」とはサンスクリット語の rūpa ルーパ。「形あるもの」の他に「変化するもの」「壊れるもの」という意味がある。玄侑宗久『現代語訳 般若心経』(ちくま新書、2006年)、39頁以降を参

照されたい。

- 20) 一連の進化論の見方については、佐倉統『進化論の挑戦』（角川ソフィア文庫、2003年）などを参照されたい。
- 21) たとえば、J. オルコック『社会生物学の勝利 — 批判者たちはどこで誤ったか』（長谷川眞理子訳、新曜社、2004年）などを参照されたい。
- 22) E.O. ウィルソン『人間の本性について』（ちくま学芸文庫、1997年）、7頁。
- 23) 同前書、16頁。
- 24) E.O. ウィルソン『知の挑戦 — 科学的知性と文化的知性の統合』（山下篤子訳、角川書店、2002年）。
- 25) ウィルソン前掲『人間の本性について』、15頁。
- 26) 同前書、16頁。
- 27) 同前書、16-17頁。
- 28) ウィルソン前掲『知の挑戦』、290頁。
- 29) 拙稿「からだで感じるモラリティに向けて — 脳科学から見た道徳」（『初等教育論集 8号』所収、2007年）も参照されたい。
- 30) ウィルソン前掲『知の挑戦』を参照されたい。
- 31) 前野前掲書、147頁。
- 32) 同前書を参照されたい。周知のとおりヒュームも指摘しているが、こうした死への不安と恐怖などの感情も宗教の源泉となる。
- 33) 前野前掲書、149頁。
- 34) 松井孝典『「わかる」と「納得する」 — 人はなぜエセ科学にはまるのか』（ウェッジ、2007年）や松井孝典・南伸坊『科学的って何だ!』（ちくまプリマー新書、2007年）などを参照されたい。
- 35) ウィルソン前掲『人間の本性について』、17頁。
- 36) 同前書、18頁。
- 37) たとえば、長谷川眞理子『生き物をめぐる4つの「なぜ」』（集英社新書、2002年）を参照されたい。
- 38) ウィルソン前掲『人間の本性について』、18頁。
- 39) 同前書、19頁。
- 40) 同前。人間生存のためのツールとしての神やアイデア。これに関しては、木田元『反哲学入門』（新潮社、2007年）105頁以降を参照されたい。
- 41) 同前書、20頁。
- 42) 同前書、21頁。
- 43) 同前書、21-22頁。傍点は引用者による。
- 44) 長谷川前掲書、195頁。

- 45) たとえば、R. ライト『モラル・アニマル（上・下）』（小川敏子訳、講談社、1995年）、M. リドレー『徳の起源—他人をおもいやる遺伝子』（岸由二監修、翔泳社、2000年）、F. ヴァール『利己的なサル、他人を思いやるサル—モラルはなぜ生まれたのか』（西田利貞他訳、草思社、1998年）などを参照されたい。
- 46) ウィルソン前掲『人間の本性について』、23頁。
- 47) 同前。
- 48) 同前書、24頁。
- 49) 同前。
- 50) 同前。
- 51) 同前。
- 52) 同前書、25頁。またウィルソン前掲『知の挑戦』も参照されたい。
- 53) M.S. ガザニガ『脳のなかの倫理—脳倫理学序説』（梶山あゆみ訳、紀伊国屋書店、2006年）、225頁。
- 54) たとえば、メランヒトンさらにトマージウスといった哲学者は、こうした先駆けのひとりであろう。詳しくは、拙稿「情念と教育—ルターとその周辺」（教育思想史学会編『近代教育フォーラム 17号』2008年所収予定）を参照されたい。
- 55) ガザニガ前掲書、225頁。
- 56) ウィルソンは『知への挑戦』で「私は、道德論はすべてのレベルで自然科学と本質的に統合すると信じる」（290頁）。そして、「科学のほうは、人間の条件に関するあらゆる前提を容赦なく検証し、やがて道德感情や宗教感情の基盤を発見するだろう」（323頁）と述べている。トマージウスも、道德を自然に基礎づけようとしている。いろいろ議論があるが、たとえば次も参照されたい。ジャン＝ピエール・シャンジュー監修『倫理は自然の中に根拠をもつか』（松浦俊輔訳、産業図書、1995年）。他には次など。Wilson, James Q. *The Moral Sense*, NY, 1993. Hauser, Marc D. *Moral Minds: How Nature Designed Our Sense of Right and Wrong*, NY, 2006. Joyce R. *The Evolution of Morality*, Cambridge 2006. これらについては、別稿で扱う予定。
- 57) ガザニガ前掲書、227頁。
- 58) たとえば、下條信輔『サブリミナル・マインド—潜在的人間観のゆくえ』（中公新書、1996年）、同『〈意識〉とは何だろうか—脳の来歴、知覚の錯誤』（講談社現代新書、1999年）などを参照されたい。
- 59) Cf. Wilson, *Ibid.*
- 60) ガザニガ前掲書、227頁。
- 61) 前掲拙稿「からだで感じるモラルリティに向けて」を参照されたい。
- 62) ガザニガ前掲書、229頁。

- 63) 同前書、230 頁。
- 64) 同前書、233 頁。
- 65) 同前。
- 66) 同前書、234 頁。
- 67) たとえば、R. ドーキンス『利己的な遺伝子』（日高敏隆他訳、紀伊国屋書店、2006 年）を参照されたい。
- 68) ガザニガ前掲書、240 頁。
- 69) 同前書、241 頁。
- 70) 同前。
- 71) たとえば、前掲『倫理は自然の中に根拠をもつか』や、D.C. デネット『ダーウィンの危険な思想—生命の意味と進化』（山口康司監訳、青土社、2001 年）などを参照されたい。
- 72) ドーキンス前掲書、311 頁。
- 73) 同前書、296 頁。
- 74) 同前書、308 頁。
- 75) 同前書、311 頁。
- 76) 同前書、4-5 頁。
- 77) デネット前掲書を参照されたい。あるいは、M.W. デイヴィズ『ダーウィンと原理主義』（藤田祐訳、岩波書店、2006 年）なども参照されたい。
- 78) 佐倉前掲『進化論の挑戦』、118 頁を参照されたい。
- 79) 前掲拙稿「情念と教育—ルターとその周辺」を参照されたい。
- 80) M. ソームズ、O. タンブル『脳と心的世界—主観的経験のニューロサイエンスへの招待』（平尾和之訳、星和書店、2007 年）、133-134 頁。
- 81) 同前書、138 頁。
- 82) 同前書、136 頁。
- 83) 本稿では、そのための予備的考察を簡単に試みたに過ぎない。別稿であらためて取り上げるが、次も紹介する予定。Robinson, J. *Deeper than Reason: Emotion and its Role in Literature, Music, and Art*, Oxford 2005. Johannes A. van der Ven. *Formation of the Moral Self*, Grand Rapids 1998. なお、人間存在へのセンス・オブ・ワンダーをめぐるっては、上田閑照『宗教—哲学コレクション I』（岩波現代文庫、2007 年）も参照されたい。